

丹波市男女共同参画センターだより

ジェンダーを考える

あるバラエティ番組で「国際的に最も影響力があった日本のサッカー選手で思い浮かぶのは誰ですか？」というアンケート調査をするコーナーがありました。私が想像したのは三浦知良さん、中田英寿さんなどです。しかし発表された回答は澤穂希さんでした。

皆さんは澤さんが思い浮かびましたか。私は澤さんの名前に「ああ、その通りだ」と大いに納得しました。国際的に大活躍し、日本の女子サッカーの発展に多大な貢献をした実績は誰もが認めるところです。ではなぜ私は彼女の名前をあげることができなかったのでしょうか。それは澤さんが女性であり、私の発想がジェンダーに縛られているからです。

ジェンダーとは生物学的な性に対して社会的・文化的につくられた性のありようのことをいいます。たとえば、私が子どもの頃、サッカーは男子がするもので、女子がボールを蹴ると「おてんば」などと非難されました。反対に男性が肩まで髪の毛を伸ばしていると「女みたいだ」と眉をひそめられたのです。それが今では女子サッカーも男性の長髪も当たり前になっています。このようにジェンダーの線引き（認識）は時代とともに変化するものであり固定的なものではありません。ところがこの変化を認めず「女とはこうあるべき、男とはこうあるべき」というジェンダーの観念に縛られていると、それは生きにくさや息苦しさへとつながっていきます。



吉岡 俊介

オフィスよしおか 代表
シニア産業カウンセラー
キャリアコンサルタント

私に関わる男性の悩み相談の現場では、内心はボロボロに疲弊しているのに、男は弱音を吐くものではない、涙を見せるのは情けないことだと思込み、無理に頑張ろうとする相談者に多く出会います。しかし弱い気持ちに蓋をして無理を重ねると、ストレスを抱え込みうつ的なことや、イライラした感情を他者に向けてしまい暴力的になることがあります。

そのような相談者に対して、私は「力と支配（パワーとコントロール）」の価値観から「涙と寄り添い」の価値観に切り替えることを提案しています。不安や怒りを覚えたときは力より涙を出すことで気持ちが楽になり、身近なひとと寄り添う平和な関係を築くことができるからです。それは従来の「男らしさ」のジェンダーの縛りや緊張から解放されることでもあります。

このように自分がいかにジェンダーに縛られているかを認識することは男女共同参画の取組に向けた第一歩でもあるのです。

最後にクイズです。父親が息子を自動車に乗せてドライブに出かけたところ、交差点で大型トレーラーと軽い接触事故を起こしてしまいました。息子が自動車を降りて接触箇所を確認しようとしたとき、トレーラーから降りてきた運転手が見て声をあげました。「なんと私の息子ではないか!」。この3人の関係はどうなっているのでしょうか。その回答は次の息子の叫び声にあります。「なんだ、ぶつかったのは母さんだったのか!」。